

小学生のころ、ほこりつぽかった図書館でズラツと並んだ『世界児童文学全集』の背表紙に手を触れながら「これが全部自分のものだと思ったら思う存分読めてどんなに嬉しいだろう」と切なく感じた、甘酸っぱいような記憶がある。我が図書館遍歴のはじまりである。

学生時代は紛争のさなかで大学に行っても休講が多く、時間をつぶすのに苦労した。

侃々諤々議論するの疲れ果て、結局独りきりになれる空間を求め図書館で閉館時刻まで粘った。今でも覚えてるが、当時中央公論社から『谷崎潤一郎全集』が発刊された。菊判で濃紺の瀟洒な装丁に金色の『谷

崎潤一郎全集』の文字が光り輝いていて胸を踊らせた。高価で到底貧乏学生には手が届かず図書館でまみえ、震えるようにしてページを繰った。殺伐とした周りの騒音から隔絶した谷崎の美の世界に耽溺し全巻を読破した。図書館遍歴の最盛期であったといえるかもしれない。

社会人になり忙しさから読書に

## わたしと 図書館



渡辺 直彦

費やす時間が限られるような素漠とした生活が続き、図書館に赴く余裕が無くなった。休日には持ち帰った仕事を処理したりで図書館に対する思い入ればかりが先行し、切歯扼腕の思いであった。今にして思えばこのころは図書館のおつきあい最悪の時期だった。

定年も間近になり仕事から自分を離れて見る事ができるようになり、また、気持ちの上でも若干のゆとりを感じられるようになって、最近では書物に触れる機会を意識的に増やそうと考えている。図書館往訪が再開され、遍歴は実りの時を迎えたと思いでいっばいである。

こうして考えてみると図書館は私にとりまさに「莫逆の友」である。子どものころから即かず離れず私の側にいて力づけ励まし、私が見限って離れたときもじっと待っていて、戻ったら心優しく暖かく迎えてくれる。こんな存在が身近にいてくれる限り、我が人生は誠に幸福であると心から思っている。

## 図書館協議会答申 『図書館事業の見直し(提言)』 が出されました

平成十九年度に図書館協議会に諮問した「図書館事業の見直し」について、今年三月に提言が出されました。その一部を紹介します。

三章「図書館のあり方」では、「西東京市図書館の基本的考え方」として、「西東京市図書館は、市民のひとりひとりが自ら学び、考え、成長し、決定し、自らの責任で行動するため必要とされる知識や情報を分け隔てなく市民すべてに提供する公共サービス機関」であり、「公共機関としての役割を認識していくことが必要で、公共団体や組織による管理運営が必須条件」と述べています。

四章「西東京市図書館運営の合理化とその評価」では、第一次・第二次行財政改革大綱に基づいた事業の見直しの取り組みについて、「大綱に沿って図書館が推進した嘱託員方式の拡大は、窓口業務等の人件費の抑制に大きな効果をあげており、大綱に示された課題に十分に対応している」と評価しています。業務委託についても、西東京市では「可能な限り業務の民間委託をすでに実施して」おり、「非基幹業務については嘱託員を活用し業務の効率化を図って」きたと述べています。

窓口業務委託と指定管理者制度に

については、市民の個人情報保護への不安や営利組織による経営の問題点、市民の声を反映できなくなる不安等、いくつかの問題が提示されています。その上で、図書館運営管理の合理化に関する検討結果として、現行の嘱託員方式について、「窓口業務への嘱託員の導入により、人件費の抑制に大きな効果をあげており、職員の指導のもと適切な対応がおこなわれ、利用者も違和感なくサービスを享受できています。また、さらに正規職員の補佐としての職域の拡大等も検討、実施されており、大綱に示された課題に十分に対応していると評価できます」と報告しています。

最後に「まとめ」として、これからの図書館事業について、①長期的人事計画の策定、②研修計画の整備、③意識改革の推進という三つの提案をしています。

「提言は各図書館にありますので、ご覧ください。また、市及び図書館ホームページからもご覧になります。

## 編集後記

下保谷図書館から始まった保谷市図書館の歩み、西東京市図書館へ引き継がれたこと、そして「今」を、引越し準備をしながら思い起こします。ふと外を見ると、下保谷図書館前の木々の緑が青々と雨上がりの空に広がっています。図書館の「これから」の始まりです。